

タコノキの果実化石発見さる

徳永重元

南九州宮崎県南那珂郡北郷町平佐の第三紀日南層群の中から このほどタコノキ (*Pandanus*) の果実の化石が発見された。

このタコノキ属は 現在太平洋地域熱帯の諸島に生育していて その種類は 200 種にのぼるといわれる。

こうしたものの果実が 化石としてわが国の新第三紀層中に見い出されたというのは 珍しいことである。果実は写真でみられるように 多くの核果が集まって形をなし その大きさは人間の頭よりも大きくなることもある。ところが今度発見されたという果実化石は茶褐色をおび石化し その長径 35cm 短径 24cm で ちょうど「ラクビーの球をたて割りしたその半分」といったような形を示している。そして化石となっているのでその細部はわからないが 1つ1つの核果の長さは 6~8 cm であり 現生種は大体 3~4cm であるから少し長いようである。

このタコノキは 単子葉植物でタコノキ科に属し 写真で示したように 高さは 20m 位までになり 幹の枝からは気根が下り 地下に入ってまたそこから根が出るといった植生上の特徴がある。葉は枝の頂きに群れて茂り 1枚の葉は線状披針形つまり幅は狭く 長さは 10~15cm になる。そして南方では腰みのの代わりや帽子に編まれ 果実は食用となっている。現在この植物はマレーシアから台湾の海岸あたりまでも分布しているが この果実化石からはその種名を早急には決められないのでさらによく調べる必要がある。こうした熱帯植物が 宮崎層群の堆積当時 海流によって流れてき そして堆積物の中に入ったということは容易に考えられることであって それとともに海流が南から 北へ流れ九州のすでに陸化していた南部の岸を洗っていたと考えることができる。宮崎層群中の海成層から産する有孔虫化石は つよい暖流の影響は示していないが やはり多少温暖な種類が多い。

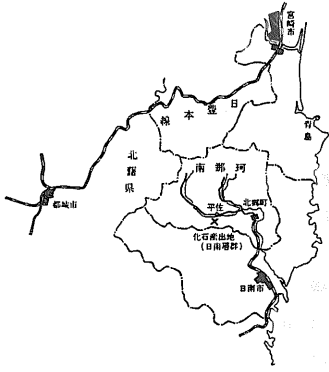
海流によってココヤシやタコノキの果実が遠方に運ばれるという例は少なくない。『名も知らぬ遠き島より 流れよる椰子の実1つ』と藤村の詩にうたわれたように ココヤシの実などは数カ月も海流によって流れただよい そのため南洋一帯に繁茂し今ではヤシの原産地の中心が どこにあるのかわからないという。こうした現在の知識をもとにして考えてみれば この化石となったタコノキの果実も はるか南方の陸地から運ばれたと考えられないだろうか。その陸地はどこか? 少なくとも琉球列島の北半ではなく 台湾付近までその源を求めなくてはならないだろう。その理由としては宮崎層群堆積時 つまり第三紀中新世後期から鮮新世の時代に すでに陸地であった地域の存在を考えなくてはならないからである。この1つの果実化石の示す古地理学的意味は 多くの興味

を私たちに与えてくれる。

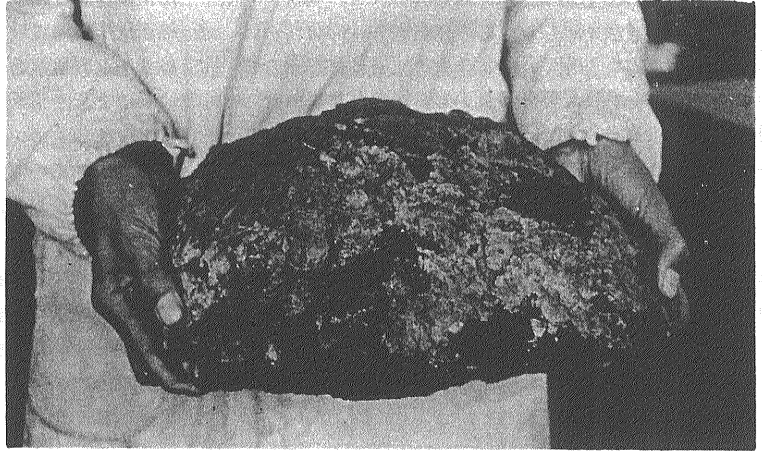
つまり宮崎層群堆積当時すでに日本列島の南部からさらに南方にかけて 暖帯から熱帯という気候帯がすでにできていたということ 海流は現在と同じような状態を示していたということ さらに果実からみて樹形は現生のタコノキよりもさらに巨大なものではなかったか ということなどを この果実化石は物語ってくれている。

(筆者は燃料部 石炭課)

(この標本は地質部木野技官が日南層群中から採集し 地質調査所標本室に保管している)

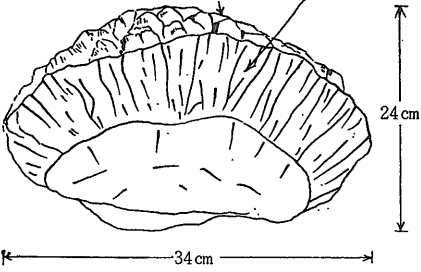


化石発見位置図

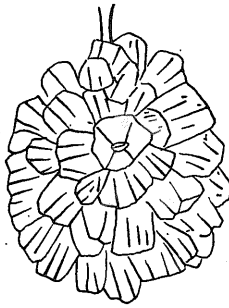


タコノキ果実の化石表面

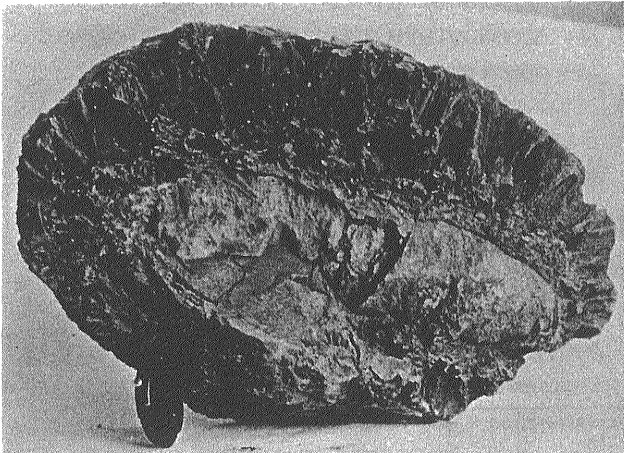
果実の表面 核果の集合



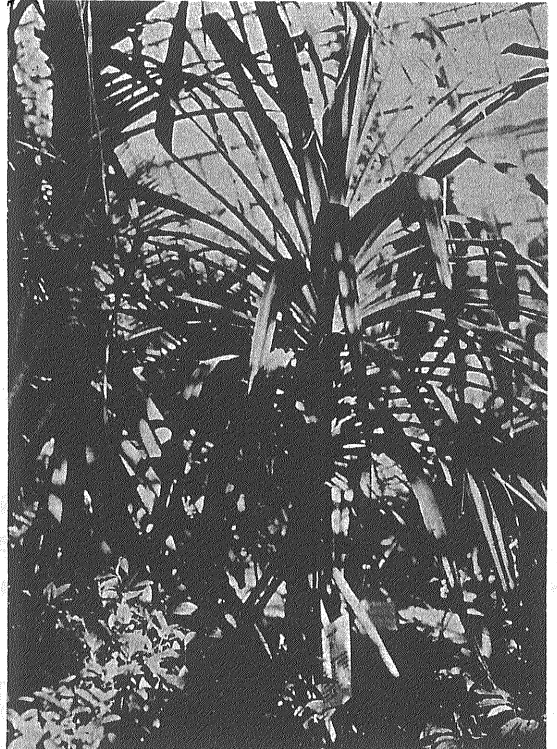
タコノキの化石のスケッチ



← 現生果実のスケッチ (多くの核果が集ってできている)



果実の断面



タコノキ(Pandanus) 特有の気根がみられる